

増補版

東出誓一 著
小山起功 編

日系ペルー移民、米国強制収容の記

涙の オーディオス

The Memoirs of SEIICHI HIGASHIDE,
A Japanese-Peruvian Internee in U.S. Concentration Camps
edited by Yukinori Koyama



増補版

涙のアデオス

東出誓一 著
小山起功 編

日系ヘルー移民、米国強制収容の記

ひがしでせいいち

東出誓一

- 1909年 北海道に生まれる。
1930年 保善工業卒業と同時にペルーに渡り、職業を転々とする。
1936年 イーカ市に洋品と小間物の店を開店、順調に商売を拡大する。
イーカ日本人会会長、中央日本人会南部地方代表理事を歴任。
1941年 日米開戦直後、英米が公表したブラツク・リストに載り、国外追放命令を受けるが、地下に潜伏して難をのがれる。
1944年 ペルー官憲に逮捕され、アメリカの強制収容所へ送られる。
1946年 仮釈放で収容所を出る。
1954年 強制送還停止の処分決定によりアメリカに永住が認められる。
1958年 アメリカに帰化し、アメリカ市民となる。この間にシカゴでアパート経営に乗り出し、成功する。
1974年 退職してハワイに移住、現在に至る。
現住所 Wailana Bldg. 1407
1860 Ala Moana Blvd., Honolulu, Hawaii 96815

こやまゆきのり 小山起功

- 1940年 横浜生まれ
1970年 ルーズベルト大学大学院修士課程修了。
現 在 専修大学教授（アメリカ史専攻）
著 書 『夢大陸アメリカ？——近代生成の社会史——』彩流社、1988年
訳 書 F・タネンバウム『アメリカ圏の黒人奴隷』彩流社、1980年。
B・クアレルズ『アメリカ革命と黒人』国書刊行会、1979年。
D・ウォーカー他『黒人論集』共訳、研究社、1975年。
現住所 町田市小野路町2572—29

〔増補版〕涙のアディオス

——日系ペルー移民、米国強制収容の記——

一九八一年十一月十五日 初版発行
一九九五年七月一日 再版発行
定 価 カバーに表示してあります

著 者 東出誓一

編 者 小山起功

発行者 竹内淳夫

発行者 株式会社 彩流社

〒102 東京都千代田区富士見二—二二

電話 〇三（三三三四）五九三一
振替 〇〇一九〇—二一五五三三九

印刷 明山印刷十赤田鉛版
製 本 （有）青木製本

乱丁・落丁はお取りかえいたします

ISBN4-88202-357-1

再版への序

本書の初版が出版されてから、はや一〇年以上の歳月が流れた。この間、本書には望外の評価が与えられ、昨年はその英語版、またこの度は日本語の改訂・増補版とスペイン語版が相次いで出版されることになり、著者としては喜びに耐えない。単なる一移民の個人史でしかなかった本書に、それ以上の意味を見出していただいた読者諸氏には、この場をお借りして心よりお礼を申し上げます。

この十数年間、わたしは、本書と本書の読者のお陰で、通常ならとても考えられないほど多くの知己を得、望むべくもない貴重な体験をし、身に余る榮譽を与えられてきた。昨年の四月には、戦時の特異な抑留体験を記録にとどめたことが評価され、ハワイ州議会から表彰される榮譽にまで浴した。これも、ひとえに本書をお読みいただいた読者のお陰と、心から感謝している。

本書の改訂に当たっては、初版の手直しに加え、新たに終章を追加することが、著者としてのわたしに課された義務であると常々考えてきた。しかし、ここ数年来進行しつつある持病のため、この任は編者に委ねざるを得なくなった。もちろん、わたしの意向は編者に伝えるが、この義務を果たしえなかったことについては読者諸氏に衷心からお詫びする次第である。

わたしの考えていた終章とは、日系ペルー人の戦後補償を扱うもので、本来なら、わたしにとっ

でもアメリカにとっても、榮えあるエピソードになるはずであった。しかし、残念ながらそうはならなかった。合衆国政府は、たしかに日系人の強制収容に対して非を認め、公式に謝罪し、賠償金を支払った。かく言うわたしも、謝罪と賠償を受けた者の一人であるが、同じ収容所で抑留生活を送った日系ペルー人同胞の中には、些細な法手続き上の不備を理由に、この補償を受けられないまま捨ておかれている者が多数いる。日系アメリカ人への補償は既に完了している。しかし、中南米からの抑留者に関する限り、われわれのように補償を受けた者はむしろ例外である。後ほど編者が詳説すると思うが、政府によるこの不当な措置の背後には、アメリカン・デモクラシーの限界とさえ思えなくもない何かがある。彼らはその犠牲者なのである。

わたし個人としては、政府によるこの措置をアメリカン・デモクラシーの限界とは思いたくないし、思ってもいない。必ずや道は開けると信じている。しかし、それにしても本書の改訂版を、全面解決した戦後補償の報告をもって閉じられないのは残念である。わが愛するアメリカにとっても残念であり、不遇な立場にあるわが同胞にとってはなおさらである。一日も早い全面決着を望む次第である。

ところで、わたしが第二の祖国と考えてきたペルーからは、近年うれしい知らせがたくさんたらされる。フジモリ政権が成立してから、たしかにペルーは変わった。政権成立当時、わたしは大いなる期待と同時に、いい知れぬ不安を抱いていた。ペルーに在住する同胞たちもそうであったらしい。だが、不安は杞憂に終わった。もちろん、フジモリ政権には批判されてしかるべきところもなくはなかった。しかし、それも当時の状況を考えればいたし方なかったのかもしれない。ともかく、

ペルーは治安を回復したし、経済もかつてとは比較にならないほど安定した。間もなく大統領選挙が行われるが、フジモリ政権がゆらぐ気づかいは、まずないだろう。

アメリカには、かつて同じ収容所で抑留生活を送った日系ペルー人の「ペルー会」と呼ばれる親睦団体がある。このペルー会が、終戦後五〇年目に当る今年、会の結成以来初めて、その総会をペルーの首都リマで開催する。七月には、アメリカからの会員に地元ペルーや日本からの参加者も合流し、盛大なリユニオンが催される予定である。わたしも、健康が許す限りこの会に参加し、旧交をあたためたいと思っている。それにしても、つい一昔前まで、このような会がこんなにも早くリマで開催できるようになるうとは考えてもみなかった。これを可能にしたフジモリ大統領とペルー国民に心より敬意を表し、合わせて、わが愛する第二の祖国に平和と繁栄が永続することを祈つてやまない。

一九九五年三月

ホノルルにて

東出誓一

まえがき

わたしは、「三つの祖国」を生きてきたと思っている。一人の人間に祖国が三つもありえようはずがないことは重々承知の上で、あえてそう言わせていただきたい。奇をてらうつもりなど毛頭ないが、これはわたしのいつわらざる実感なのである。

辞書が言う意味でのわたしの祖国は日本である。わたしは、一九〇九年（明治四二年）北海道に生まれ、少年時代の大半をその閉鎖的な山村で悶々と過ごした。しかし、ようやくそこを脱出して移り住んだ東京も、折から大恐慌のまっただ中で、所詮は八方ふさがりの袋小路的小世界でしかなかった。わたしは、かつて北海道脱出を夢見た時と同じように、今度は開かれた世界を求めて日本脱出を夢想し、海外へ目をはせるようになった。

わたしの求めた新天地は南米のペルーであった。しかし、一九三〇年（昭和五年）、そこに渡ったわたしは、日本出発当初の期待とはうらはらに、日本以上に偏狭で閉鎖的な日系移民の小社会に埋没した。だが、人生とは不思議なものである。わたしは、ふとしたことを契機にペルー人の社会とかわりを持つようになり、それからというもの、次々と眼前に展開する新しい世界で、無限に広がる夢を追うことができるようになった。わたしは、こうしてペルーに根をおろし、そこを「第二

の祖国」と考えるようになった。

しかし、それもつかの間であった。一九四一年（昭和一六年）、日米戦争が開始され、翌四二年早々、ペルーが日本と国交を断絶すると、わたしたち日系人は、ことごとく敵性外人としてペルー官憲から弾圧を受け、最終的には、予想もしなかったアメリカ合衆国へ追放され、同地の強制収容所で長期に渡る抑留生活を送ることになった。

やがて戦争は終わった。しかし、見知らぬ国へ拉致されたわたしたちにとって、それは新しい苦難の始まりでしかなかった。戦後、わたしたちには二つの道が残されていた。一つは、交換船で日本へ帰ることであり、もう一つはアメリカにとどまることであった。わたしは、当然予想される多くの困難を承知で、あえて後者の道を選んだ。その結果、わたしは、「条件つき仮釈放の不法入国者」という烙印を押され、すさまじいアメリカの競争社会へほうり出された。

予想通り苦難の連続であった。しかし、ともかくわたしはこの試練に打ち勝った。そして、自らの意志で選んだこの新しい「第三の祖国」に根をおろし、一九五八年（昭和三十三年）、晴れて市民権を取得して名実共に合衆国市民となった。

わたしは、半世紀に及ぶ海外での生活を経た今日、依然として精神的には純粹な日本人だと思っている。しかし、同時に、戦争という不測の事態がなかったなら、おそらくわたしはペルーに完全に根をおろし、その市民権を得て、その地に骨を埋めることになっていたと思う。わたしは、それほどペルーを愛し、その国にコミットしていたのである。同じことはアメリカ合衆国についても

言える。今日、わたしは、合衆国市民であることを誇りにし、名誉だと思っている。

わたしにとって、これら三つの国は、「祖国」という言葉でしか表現しえない何か特別な意味を持っている。いずれも断ちがたい郷愁をそそるし、その地にあれば、自宅にいるのと同じような安らぎを覚える。また、わたしは、それらの国と心情的に断ちがたい帰属意識で結ばれており、どれ一つを除いても自己をアイデンティファイできないとさえ思っている。「三つの祖国」を生きたという表現はたしかに奇妙である。しかし、今のわたしにとって、わたしの一生はこうしか言いようがないのである。

本書を書くことになった直接の契機は、わたしの子供たちが、わたしに記録を残すようすすめたことであった。わたしとしても、いずれは何らかの形で自分の一生を記録に残しておきたいと思っていた矢先だけに、ともかく思いつくままを書きつけてみることにした。何せ文筆とはおよそ縁遠い一移民の書くものであるから、要領を得ない箇所も少なくないと思う。その点は、ただ頭を下げて許しを乞うばかりである。本書に登場するできごとはすべて事実で、人名地名等も、特にさしざわりのない限りすべて実名で通した。本書は、ご覧の通り、わたしの個人史であるが、出版するかには、大きな歴史のうねりとなるべく多くの接点を持つべきだと考え、純粋に私的な部分は極力圧縮することにした。しかし、それでも自伝という性格上、私的な部分も決して少なくない。特に一章と二章は多分に私的な記述が続き、読者は退屈されるかもしれない。場合によっては、三章からお読みいただくのも一策かと思っている。

わたしをささえてくれた
すべての人たちに

本書を捧げる。

目次／涙のアディオス

口 絵

再版への序

まえがき

I 北海道移民の子——わたしの家族と生いたち—— 9

II 海外雄飛の夢を追って——東京における苦学の日々—— 31

III 新天地ペルー——荒木商会の「居候」—— 53

IV 一本立ちを求めて「転進」——また「転進」——カニエテの四年間—— 86

V 忍び寄る暗雲——イーカでの成功と時代の流れ—— 112

VI 吹きすさぶ弾圧の嵐——戦時下の「敵性外人」—— 143

VII あわれな「日本国民軍」——ペルーからパナマの仮収容所へ—— 171

VII 「ユートピア」の試練——アメリカ合衆国、強制収容所の日々—— 201

IX 鉄条網の町から金網の町シブルクへ——仮釈放でアメリカ社会の現実へ—— 231

X コンクリートのフロンティア——シカゴでのどん底生活と明日への希望—— 262

XI アメリカ化する「不法入国者」——安定したシカゴでの日々—— 291

XII 海と太陽の楽国・ハワイ——わたしが求めたもの—— 317

あとがき 340

編者の追記 342

増補 再版への編者の追記

アメリカにおける日系中南米人の戦後補償 347

涙のァディオス——日系ペルー移民、米国強制収容の記——

